

ホノルルにおける日本人旅館の変遷 (一)

飯 田 耕 二 郎

はじめに

前号では、ホノルルにおける日本人旅館の草創期から一九二〇年頃までの変遷を明らかにしようと試みた。本稿ではそれ以後の日本人旅館の役割や第二次大戦を経て、現代に至るまでの変遷についてまとめてみたい。

1. 母国観光団の主催

① 第二次大戦前

日本人旅館の主要な業務として旅行手続きの斡旋があるが、これと関連して日本への観光の主催や後援があった。一九一〇年頃になると、ハワイの日本人も特定の職業に定着し、経済的に余裕のある者が次第に多くなり、自分の郷里や日本の観光に出かける人々が出始め

た。こうして母国観光団が次第に多くなり、日本人旅館がこれを後援し、やがて主催する観光団が増えていった。

海外からの日本への観光団の最初はハワイからの日本人によるもので、それは一九一二（明治四十五）年五月十四日、春洋丸でホノルルを出帆した。団長は田坂養吉、副団長は小出寅吉、団員は五一名であった。副団長をつとめた小出寅吉は、前号で紹介した尾道屋旅館の創業者で、この母国観光団の旅行手続き一切を取り扱った。六月三日に横浜に入港した後、東京から始まって、関東、中部、近畿、中国、九州地方を約一ヶ月にわたって見学した後、熊本で解散。その後は団員の生まれ故郷を訪問し、七月十六日にハワイに戻るといふもので、二カ月の旅行費は一七〇ドルであった。この観光団は日本の各地で官民あげて大歓迎をうけたが、そのことを当時の日本語新聞である『日

布時事』が逐一報道して、ハワイの在留日本人に大きな刺激を与え、日本觀光熱を煽った。⁽¹⁾

一九一四年には、当時布哇日々新聞の主筆であつた小野寺徳治が团长となり、日本語新聞社の贊助のもと十月九日発の天洋丸で訪日した。⁽²⁾

一九一五年、多年ハワイの移民局に勤務し獣医であつたドクトル勝沼富造を团长とする觀光団五一名が九月十日にホノルル発の春洋丸で日本に向かつたが、これは京都で挙行される大正天皇の即位の大典を拝観する目的とし、その前後に日本各地の旅行をなすもので、宿屋組合の主催であつた。宿屋組合を代表して川崎旅館の川崎喜代蔵が一行に参加するはずであつたが、都合により参加できず代わりに米屋旅館の隣でトロンコ(トランク)店を經營した中津柳太郎が宿屋組合の代表として参加した。⁽³⁾

一九一九年三月には、布哇報知の記者、小那覇三郎の主催する沖繩觀光団が天洋丸でホノルルを三〇日に出帆。横浜より東京、日光、名古屋、伊勢、山田、奈良、京都、大阪、神戸から中国地方を経て、九州、沖縄に及ぶもので、団員六一名のうち沖縄出身者は一七名であつた。⁽⁴⁾

一九三〇年にも、同じ沖縄出身で、布哇屋旅館主山城徳助の日本觀光団は六月六日ホノルル出発、日光を振出しに各都市を見物しつつ、九州を縦断し鹿児島から沖縄県那覇まで行つて解散する(日布時事、一九三〇年六月七日)という記事が見られる。⁽⁵⁾

このように日本への觀光団は年を追つて盛んとなり、これが事業として軌道に乗ると、最初は觀光団を後援し協力してきた日本人旅館は、本格的に営利事業として觀光団を主催することとなった。また、日本人旅館や旅行案内社と提携し、その後援のもとに母国觀光団を引率して訪日する職業的な觀光団長が現れるようになった。日本を訪れるのは春の桜の咲く季節と秋の紅葉の季節が多かつた。

また各種の日本人団体や倶楽部、各宗教団体や商業組合、日本語学校の生徒およびハイスクールや大学の学生などで組織する觀光団が日本を訪れた。例えば、堺七蔵を团长とするハワイ在留の日本赤十字社員三〇名からなる日本觀光団が一九二〇年四月二三日に天洋丸で出発している。⁽⁶⁾

さらに一九三〇年代になつて日本が満州や中国大陸に侵攻して勢力を拡大すると、ハワイからの訪日觀光団も日本内地から満州や中国大陸の各地に足を伸ばす大々的なものが出現した。

当時の世相を反映したものとして、一九三八年三月二日に秩父丸で出帆し日本を訪問した觀光団は、「皇軍傷病兵慰問団」と称し、総務が米屋旅館の米屋三代樵、团长は東北旅館の東海林甚七であつた。⁽⁷⁾ その時の『布哇報知』の記事を以下に紹介しておこう。

「我が皇軍の傷病將兵に対する布哇からの最初の慰問団は日本人旅館組合主催の下に愈々本日母国に向け出発するが、昨夕旅館組合の発表によれば参加団員数は九十七名にして布哇全島より募集せし皇軍慰問

袋の実数は木箱約二百函入九千六百八十六袋に及んでいる。尚其の以後の分もあるので残部は取纏めて次の四月六日の大洋丸便にて送付する由慰問団の幹部は総務米屋三代植翁、团长東海林甚七氏、主務藤本憲吉氏にて横浜到着後通信員として特に本社の牧野勲氏と日布の山下草園氏を囑託し、日本内地旅行の案内役は横浜外航旅館組合が担当し万遺漏なきを期しているとのことである。⁽⁸⁾

第二次大戦直前の一九四〇年には、『日布時事布哇年鑑』の記事によると「今春今夏布哇より日本を訪ふ見学団は一七団体の多数に上る」、また同年三月二〇日「五組の観光団を初め多数の日本訪問者で横浜行の浅間丸賑ふ」とある。⁽⁹⁾

② 第二次大戦後

第二次大戦中は、いうまでもなく母国への観光団は中絶していたが、戦後の一九四九年四月二九日、横浜着のゴードン号で重永茂夫团长と高吹勇团长の最初の二団がホノルルより日本に到着した。⁽¹⁰⁾これは占領軍司令部からバイヤー以外の者が、六〇日間訪問を許された直後のことで、初の個人訪問者は四月十五日に横浜に着いた。一行は規定の食料持参で来て、施設も食料事情も悪い不便な観光を続けたが、それでも立ち上がる人々と親切な歓迎に深い感銘を受けた。重永観光団の一行は二一名であった。⁽¹¹⁾

一九五二年のサンフランシスコ講和条約の発効によって日本が独立

を回復し、同年より日本への観光も本格化した。同年一月に小林ホテルによる「布哇二世母国親善視察団」の募集広告が見られる。ホノルル発が同年三月二二日、約二ヶ月の日程で、引率者の一人として同ホテルの西力の名前があがっている。⁽¹²⁾

その後、例えば一九五六年の春にはハワイから約四十の日系団体が日本を訪れた。とくに三月二二日ホノルル発、同三一日横浜着のクリーヴランド号には一四の観光団が乗船し、その内には米屋・小出（尾道屋）・山城・中村・布哇屋などのホテル主催の団体がみられた。また、パンアメリカンと日航機で乗りつけるものも二〇団体ほどであった。⁽¹³⁾ 同年秋にも約一〇の観光団が日本を訪れた。そのうちホテル主催のものは、春とほぼ同じであるが、中村ホテルは川崎ホテルとホノルル旅行案内所（中村ホテルの中村勇一が社長）との合同主催という形をとっている。いずれも八月三〇日のウイルソン号と九月六日の飛行機で出発とある。⁽¹⁴⁾

一九五八年の春にも日本を訪れる日系の団体が船と飛行機便で約四〇団に及び、個々の訪日者を加え約二千名であった。船便による観光団は、ホノルル二月二五日出帆のウイルソン号が四団体、同三月十九日出帆のクリーヴランド号が一四団体、四月十二日出帆のウイルソン号が六団体で、このうち小林ホテル扱いが六団、山城ホテル扱いが五団、小松屋ホテル扱いが五団、布哇屋ホテル扱いが二団、米屋・中村・川崎・東北・尾道屋ホテル扱いが各一団、その他旅行案内社扱いが一団であり、ほとんどのホテルがそれぞれの観光団も主催してい

る。⁽¹⁵⁾ またこの頃、毎回観光団を引率する名物の観光団長もおり、このうちの数名が紹介されている。⁽¹⁶⁾

一九六一年春の場合は、ハワイから五〇団体、合衆国、カナダ、ブラジルからのものも合わせて約八〇の日系観光団のざつと二千名が訪日した。この年は、法然上人七百五十年、親鸞聖人七百年忌大法要で京都に参拝するものが多かった。ハワイからの日系観光団のうち、小松屋ホテル扱い一四、小林・中村ホテル扱いが各八、尾道屋・布哇屋・川崎東北・米屋ホテルが各一、その他旅行社扱いが一六で、山城ホテル主催団は引率者が病後の為に春は中止とみえる。⁽¹⁷⁾

このように年々、日本への観光団が盛んになっていったことがうかがえる。

2. 戦前ホノルル日本人旅館組合の時代

第一次大戦後、ホノルル宿屋組合はホノルル日本人旅館組合と改称された。一九一九年発行の『布哇日本人年鑑』の各種団体の中ではこの名称で登場する。⁽¹⁸⁾

前号で紹介した一九二〇年頃の旅館は、この当時のものである。このうち上里旅館については、沖縄出身の「日布時事社員、上里由明氏は今回同社を辞し、キング街宮本自転車店少し先の元朝鮮人旅館たりし所を譲り受け、来る二十日より旅館を開業す可しと云ふ、同氏は曩に川崎旅館に店員として数年勤務をし経験あれば旅館業には玄人として見るべく開業の上は繁盛することならん」との記事が一九一七年十

一月の『布哇報知』にみられる。⁽¹⁹⁾ 沖縄出身者による旅館に関しては、一九一九年に山城徳助が日本人旅館の布哇屋旅館を創業、さらに一九二五年十月二四日の『布哇報知』に「宮里貞寛氏はヌアヌ街総領事館下にホノルル旅館を開業したる旨の通知状を各方面に発送せり」とあり、旅館開業の広告もみられる。⁽²⁰⁾ 布哇屋旅館については、一九三四年に山城徳助と嘉数亀二との間で争奪をめぐって裁判があり、結局は嘉数亀二が所有、経営することになった。⁽²²⁾ 一九三六年にはホノルル旅館でも同様の争いがあり、安里永秀と島袋清・上原正吉両人との間で裁判の結果、ホノルル旅館は安里永秀が館主、島袋清は球陽旅館の館主となっている。⁽²³⁾ そして一九四〇年四月には、なぜか後にハワイで有名な学者となった湧川清榮がこれを譲り受け経営することになり、一九五五年までには譲渡または廃業になった。⁽²⁴⁾

ここで、一九三二年と一九四一年の両年度について、ホノルル日本人旅館の所在地と館主の名前(その出身県)を『日布時事布哇年鑑』の記載にもとづいてあげておこう。(表1)

一九四一年では創業の古い川崎旅館、小林旅館、尾道屋旅館、山城旅館が二代目の館主に代わっている。ここでは、当時から戦後にかけて有名であった二つの旅館について紹介しておこう。

共楽館

最初、山口県熊毛郡佐賀村出身の石本庄吉が一九一九年頃に創業したもので、彼は一九〇三年ハワイに渡航、ハワイ島クワイハイレ耕地で就労後、ホノルルに出て旅館を経営したが、一九二五年にこれを濱

表1 ホノルル日本人旅館の所在地と館主名(その出身県)(ABC順)

1932年			1941年
エンマホテル	エンマ街	石本庄吉(山口)	同左
布哇屋旅館	リバー街	山城徳助(沖縄)	→北キング街 嘉数亀二(沖縄)
ホノルル旅館	ペニヤード街	安里永秀(沖縄)	→アラ街 湧川清榮(沖縄)
川崎旅館	ククイ街	川崎喜代蔵(山口)	→川崎正一(山口・ハワイ生)
九州屋ホテル	北キング街	比嘉カメ(沖縄)	→横山政真(沖縄)
小林旅館	ベレタニア街	小林セキ(広島)	→小林金衛(広島・ハワイ生)
小松屋ホテル	北キング街	佐藤一朗(山口)	同左
米屋旅館	リバー街	米屋三代楳(山口)	同左
共楽館	ヌアヌ街	濱田勘吾(広島)	同左
			球陽旅館 アアラ街 島袋 清(沖縄)
ミカドホテル	北キング街	宮川真太郎(熊本)	
中村旅館	カレッジ・ウォーク	中村勇一(広島)	→ベレタニア街 ヌアヌホテル ヌアヌ街 田辺三三(広島)
ヌアヌ温泉ホテル		神田梅吉(山口)	
尾道屋旅館	ベレタニア街	小出祐一(広島)	→リバー街
			ペンサコラ・ホテル ペンサコラ街 原田常太郎(佐賀)
西海屋旅館	ベレタニア街	長谷川速水 (熊本・ハワイ生)	同左
神州屋馬場旅館	アラ街	馬場徳慈(新潟)	同左
			大正ホテル 南スクール街
東北旅館	ベレタニア街	東海林甚七(福島)	同左
山城旅館	ベレタニア街	山城松太郎(広島)	→山城正義(広島・ハワイ生)

『日布時事布哇年鑑』日布時事社、1932-33年および1941年より飯田作成

田勘吾に譲渡し、一九二八年からはエンマ街に転じ、エンマホテルを
 経営した。⁽²⁵⁾ 濱田勘吾は広島県佐伯郡五日市町出身で一九〇七年にハ
 ワイに来航、ハワイ島ヒロのボーディング・スクールを卒業し、ホノ
 ルルやカウアイ島で商会員として過ごした後、共楽館を引受ける。⁽²⁶⁾ ヌ
 ア街のフォスター植物園の向かい側の閑静な場所にあった。下町の旅
 館とは違った雰囲気、日本の著名人が宿泊した。女優の水谷八重子
 と義兄の水谷竹紫、一灯園の西田天香、講道館の嘉納治五郎などが逗
 留したといわれている。⁽²⁷⁾

中村旅館

創業者の中村勇一は、広島県佐伯郡地御前村出身で、一九一三年に
 カウアイ島在住の父の呼寄せでハワイに来航し、布哇中学に通学のか
 たわら、同郷の小林旅館に勤務し、一九二八年に独立して北ベレタ
 ニア街アラ公園前に中村旅館を創業したとあるが、『日布時事布哇年
 鑑』によると一九三二―三三年に中村旅館主とみえる。また、最初の
 場所がカレッジ・ウォークといって、入口が山城旅館の裏手に面し不
 便であったが、尾道屋旅館がリバー街の川崎屋旅館の跡に移転したの
 で、その跡を譲り受けた。『日布時事布哇年鑑』の住所録では一九三
 四―三五年にベレタニア街に転じている。戦前から戦後にかけて繁栄し
 たが、ホノルル市の地区改善計画のために立ち退きを余儀なくされ、
 一九六五年に南キング街ペンサコラ街近くに移転し、一九八〇年には
 四階建てのビルを新築して中村ホテルと中村旅行社を営業したが、中
 村氏の死後に建物を売却し、二〇〇二年当時では旅行社のみの経営と

なった。²⁹⁾

3. 戦後の小林ホテルの例

中村旅館の例でみられるように、戦後に日本人旅館は名前をホテルと変え、建物を木造から鉄筋コンクリートのビルに建て替えて、旅行社の営業とともに一時発展したが、ワイキキへの大規模なホテルの進出などの影響により、次第に旅館業は衰えて廃業を余儀なくされ、旅行社のみの経営もしくはどちらも廃業してしまったのである。その代表的な例として、小林旅館（戦後にホテル）について述べてみよう。

小林旅館については前号で紹介したように、小林卯之助が創業し弟の小林金次郎が二代目となったが一九二四年に病没した。その後しばらくセキ夫人が後を継いだが、三男四女の子育てと教育のためにハワイと日本を往復するなど多忙のため、連れ子の西力が支配人となった。一九三八年に早稲田大学を卒業してハワイにもどった長男の小林金衛が館主となり、西支配人の後見のもと弟の七郎、達吉も協力し、一九三一一三八年のアメリカの大不況や日米開戦を乗り越え、戦後に日本人業者の最大手として発展していった。³⁰⁾

一九五五年には小林トラベルサービスが組織された。さらに一九〇三年に建てられた木造三階の建物は建て替えられ、一九五七年に三階建てのコンクリートの建物ができた。³¹⁾一年前の一九五六年、ハワイタイムス紙に発表された新館計画は以下のようである。

「三階建石造ハウス」

新館の設計は新進の小野寺謙治氏に依り作製され最新式モダンな建物で総請負はハリー小林氏、工費約四〇億円で現ホテル建物より一〇呎（フィート）引きこみ一三一呎に奥行き四〇呎の建物、表はホテル事務所を中心に五軒の店舗、中央にツライブウエー、内部はガーデンを築造し、二階、三階に現代式設備を施した客室三〇ルームあり一部は和洋折衷のルーム、ルーファードンには約二〇〇人位収容する社交室設置計画、階下は顧客の荷物保管倉庫に使用。³²⁾

これにより、小林ホテルは新築の三〇部屋と一九二三年に背後に建てられた二階建ての別館の二三部屋からなっていたが、一九六七年には三階建てのコンクリートの別館が並んで加わった。

一方で小林金衛社長は、一九六四年からハワイに来るようになった大型ジェット旅客機に対応するため、ポリネシアン・ホスピタリティ・バス会社の経営およびワイキキ・グランドとクイン・カピオラニ、他島のホテルなどの中流ホテルの経営に乗り出して成功した。しかし中流ホテルを次第に整理し、大型バス経営を中心にその力を結集する方針となり、小林ホテルも二六室のホテル経営のみで、残りのスペースは商店と事務所となっていたが、一九八二年になってついに九〇年間にわたった北ベレタニア街二五〇〇の小林ホテルの建物と土地は、バス会社の発展のためイヴィレイにある別の土地と交換して手放

した。⁽³³⁾

一九九九年に小林金衛社長は亡くなったが、現在はその子供が社長を継いでいる。筆者が小林金衛元社長の末弟にあたる小林達吉氏に二〇〇二年インタビューをした時に渡された名刺によると会社の事業内容は次のようである。

「小林トラベル・サービス」(海外旅行部) おもに日本への旅行の斡旋をおこない、ホノルルとハワイ島ヒロにオフィスがある。

「アロハ・ワールド」(国内旅行部) アメリカ国内の旅行を扱う、ホノルルにオフィス。

「ザ・ツアー・ショップ」(オプション・ツアー取扱部) 主に日本からの旅行客を扱う、ホノルルにオフィス。

「ポリネシアン・ホスピタリティ」(バス会社) ホノルルとマウイにオフィス。

彼は、各会社の取締役常務理事で副社長という肩書であった。ホノルルの旅行関係のオフィスは、当初は小林ホテルのある場所であったが、現在は南キング街一〇四〇でマッキンレー高校の山側のビルに居を構えており、バス会社はパシフィック街三三〇で、小林ホテルの土地と交換した土地にある。

むすびにかえて

二〇〇〇年に筆者がハワイに滞在し、あるとき家族でハワイ島への一泊ツアーに参加した際、ホノルル空港からアパートに戻る送迎バスの運転手が大相撲の横綱・曙の弟であったのには驚いた。後に小林達吉氏にそのことを話すと、彼は「ポリネシアン・ホスピタリティ」(バス会社)の従業員とのこと。多くの日本人がハワイ観光に訪れるが、ツアーのバスなど小林トラベルサービスの関連会社が今でも関わっているのである。しかしこのように姿を変えながらも百年以上営業を続けるという例は稀であり、他は全ての旅館(ホテル)はなくなり、わずかに旅行案内所の看板が残っているのは東北ホテルと米屋ホテルぐらいである。やはり商売を三世代にわたって続けることはいかに困難であるかがわかる。

戦後しばらくは日本人もダウンタウンにある日本人ホテルに宿泊していたが、旅行客が増えるにつれ、ワイキキにホテルが次々と建ち、日本人もワイキキのホテルに泊るようになり、日本人ホテルの需要が減少し、廃業へとつながったのである。戦前からあった旅行斡旋については、戦後も日本への観光団を中心として繁栄するが、日本の大手の旅行会社の進出などにより、これもほとんどの会社が廃業してしまっただけである。

しかし、ハワイの中心地ホノルルにおける日本人社会の中心的存在として、その草創期から現在まで機能してきたことは間違いない。宿泊、日本や他島への旅行手続き、諸官庁への届出、仕事の周旋など、

その役割は非常に大きなものであった。

〔付記〕明治・大正期、日本からやって来た移民が、ホノルル港に着いて日本人旅館に向うまでや旅館内の様子が、宮本一男『ハワイ二世物語』（中山書房、一九六八年）、芳賀武『ハワイ移民の証言』（三一書房、一九八一年）などに詳しく描かれているが、長い記述のため、本稿では掲載しないことにした。なお、この研究には、平成一八～二一年度科学研究費基盤研究（A）「日本におけるエスニック地理学の構築のための理論的および実証的研究」研究代表者・山下清海・筑波大学大学院教授）の分担金を使用した。

注

- (1) ①相賀溪芳『五十年のハワイ回顧』、同刊行会、一九五三年、二九六頁。②川添樫風『移民百年の年輪』、同刊行会、一九六八年、二五二頁。③広島県編『広島県移住史・資料編』、第一法規出版、一九九〇年、六九六～六九八頁。④ジャック・Y・タサカ『戦前に隆盛を極めたホノルルの日本人旅館』（『EAST-WEST JOURNAL』、二〇〇二年八月十五日）。
- (2) 注(1)の④、および『布哇報知』一九一四年九月九日号。
- (3) 注(1)の①②④、および『布哇報知』一九一五年九月十日号。
- (4) 注(1)の④、および『布哇報知』一九一九年三月二十九日号。
- (5) 比嘉武信『新聞にみるハワイの沖縄人九〇年―戦前編―』、一九九〇年、二四三頁。
- (6) 『布哇報知』一九二〇年三月五日号。
- (7) 注(1)の②。
- (8) 『布哇報知』一九三八年三月二日号。
- (9) 『日布時事布哇年鑑』、日布時事社、一九四一年、四四・四五頁。
- (10) 『ハワイ日本人移民史』、ハワイ日本人連合協会、一九七七年、二一八頁。
- (11) 『訪日日系観光団復活十周年』（『米布時報』一〇三号、一九五九年八月五日）。
- (12) 『米布時報』一七号、一九五二年一月五日。
- (13) 『米布時報』六八号、一九五六年四月五日。
- (14) 『米布時報』七二号、一九五六年八月五日。
- (15) 『米布時報』八九号、一九五八年一月五日。
- (16) 『米布時報』一一〇号、一九六〇年四月一日。
- (17) 『米布時報』一二〇号、一九六一年三月一日。
- (18) 『布哇日本人年鑑（第一六回）』、布哇新報社、一九一九年、一五〇頁。
- (19) 『布哇報知』一九一七年十一月十四日号。
- (20) 注(5)、三三七頁。
- (21) 『布哇報知』一九二五年十月二四日号。
- (22) 注(5)、三三七・三三八頁。
- (23) 注(5)、三八三～三八五頁。
- (24) 『アメリカと日本の架け橋・湧川清榮―ハワイに生きた異色のウチナンチ―』、ニライ社、二〇〇〇年、四二頁。
- (25) 松田元介『防長人士発展鑑』、山都房、一九三六年、七二八頁。
- (26) 曾川政男『布哇日本人名鑑』、同刊行会、一九二七年、三六頁。
- (27) 注(1)の④、および本田政亥（緑川）『さよなら電車』、博文社、一九七三年、二八〇・二八一頁。
- (28) 注(1)の④。
- (29) 同前。
- (30) ①「一世紀を迎えるハワイ日系企業一八九一―一九九一」（『The Hawaii Hochi』、一九九一年一月一日）。②「ハワイの日系社会を見続けた小林達吉氏一七」（『EAST-WEST JOURNAL』、二〇〇五年一月十五日～八月十五日）。
- (31) 『End of an Era for Kobayashi Hotel』（『HONOLULU STAR

BULLETIN』一九八二年四月十九日。
 (32) 『Hawaii Times』一九五六年六月一日。
 (33) 注(30)の①および注(31)。

告 別

兼て皆様から非常な御配慮を頂きました皇軍
 傷病兵慰問團總計九十六名は愈々本日の秩父
 丸で日本に行くことになりました。殊に皆様
 から御寄進になつた慰問袋一万个を携へ私共
 下名の者は日本内地の軍病院十六ヶ所へ適當
 の配給方を總領事館に御願ひし同船に積荷い
 たしました。

本當に皆様の御好意を篤く感謝致します。
 では皆様の御健勝を御祈りすると共に感激に
 あふれつゝ日本へ行つて参ります

昭和十三年三月二十二日

ホノルル日本人旅館組合主催

皇軍傷病將兵

慰問見學團

總務 米屋三代 榎
 團長 東海林甚七
 主務 藤本 憲 吉

旅館組合書記 馬 堀 徳 整
御高配の下に完成した慰問團も、急本日出發することになりました。一枚各位に篤く御禮申上げます。日本に於ける通信を左記の人々に御願ひして通信陣の充實を計る考へでありますから御明待を願います

日布時事東京特置員 山下 草園
 布哇報知東京特置員 牧野 勳

ホノルル日本人旅館 組合の歴史と事業

【ホノルル日本人旅館組合は明治三十三年（一九〇〇年）の創立で今年を以て實に四十二年の歴史を誇るホノルル日本人旅館に於ける最も古き實業組織の一つである。創立當時は「宿屋組合」と稱し、その頃組織であつた旅館及び其附帯事業の統一を圖り同胞への奉仕の實を全ふすべく組織したのである

【旅館組合の歴史は其まゝホノルル日本人歴史の一部と言ふも過ぎなきものであつて、遂く契約移民時代より今日まで組合の各旅館が取扱つた數は十萬作のホノルル入國手續き（飛布陸渡米、妻子女子呼寄、時入國）等の取扱は極めて重要なものである

【斯う本組合の旅館は其本業たる旅館業の外、出入國に關する諸官廳、汽船航業協會社の手續き等事情に不案内なる同胞のため誠實に之を取扱ひ來り、其サービスの權は日米官民の間に齊しく認識されてゐる。旅館の記録が有力なる證據となつて困

難なる上塵が許可された等の實例は少くない

【本組合は現在下記の如く十四旅館を會員とし各員一致協力して旅客サービスと之に關聯せる各種手續きを誠實に取扱ひ、各旅館とも時勢に作ふ施設の改善に邁進してゐる

觀光部の事業

【本組合は數年前觀光部を設け毎年日本内地及び滿洲の見學視察旅行團等を組織し組合幹部を統率して渡日せしめてゐる

これは本組合の副事業として整し適切なものであり事業の盛

進、平和極度の時は益々之を擴大し日米文化交流の途上に貢獻したいと念願してゐる

ホノルル日本人旅館組合 * JAPANESE HOTEL ASS'N OF HONOLULU

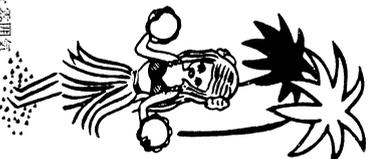
(いろは順)

- 布哇屋旅館 電話二八九六 郵箱七五三
- ホノルル旅館 電話二八九六 郵箱七五三
- 湯川清樂 電話五五四四 郵箱九三六
- 東北旅館 電話四〇九二 郵箱八三四
- 尾道屋旅館 電話三三二一 郵箱一五四
- 川崎旅館 電話參壹四 郵箱八九五
- 中村旅館 電話三七〇六 郵箱九三三
- 山城旅館 電話三三二七 郵箱一壹三
- 小松屋旅館 電話二六九七 郵箱八七四
- 佐藤旅館 電話四六一二 郵箱三五五
- 米屋三代理 電話三五五三 郵箱九四〇
- 西海屋旅館 電話四六七一 郵箱三五五
- 九州屋旅館 電話四〇九二 郵箱九九四
- 横山政眞 電話五〇四 郵箱七二
- 球陽旅館 電話五〇四 郵箱七二
- 島袋旅館 電話四二八 郵箱一〇參
- 神州屋馬場旅館 電話參〇八 郵箱八五五

『日布時事布哇年鑑』(日布時事社 1941年)

Hawaii ハワイ

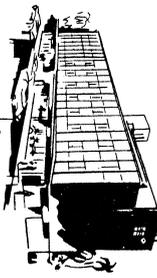
大平洋のバラダイス・ハワイに御旅行には近代設備の小林ホテルをご利用下さい。



日本人経営の気楽な雰囲気
外国で日本語が自由に通じます
観光案内
個人・団体のハワイ観光を手配します
ガイドは日本語

住地
ショッピングセンターに近く空港海辺まで二十分
予約は旅行社又は直接当ホテルへ







Kobayashi Hotel

250 N. BERETANIA ST. HONOLULU, HAWAII
PHONE 562-377

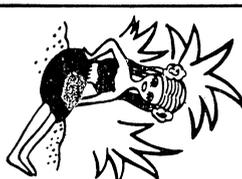
『ハワイ事情』(布哇タイムズ社、1964年版)

ハワイの 旅行プランは

小林・トラベル・サービス
におまかせ下さい。

70年の歴史と経験をもった小林
トラベル・サービスが皆様のお
しいプランをお作り致します。
ご旅行についてのことなら何
でもご相談下さい。





小林 KOBAYASHI
トラベル・サービス
TRAVEL SERVICE

TRAVEL DESK IN
250N. BERETANIA ST. THE WAIKIKI GRAND HOTEL
PHONE 569887 HONOLULU, HAWAII 134 Kapihanu Ave. Honolulu

